公共経済学（古田）　　2003.5.9

第１章補足：企業行動

１．企業行動

企業は利潤最大化行動をとる。

利潤 (Π) ＝収入 (Revenue) －費用 (Cost)

①これから、利潤極大化（最大化）の条件は、以下で与えられる。

限界収入（MR）＝限界費用 (MC)

②完全競争の場合

完全競争の下では、市場価格は一定であり、限界収入 (MR) ＝価格 (p)　である。

したがって、完全競争の場合は、利潤極大化の条件は、価格 (p) ＝限界費用 (MC)　となる。

２．問題

問題１：　利潤最大化の考え方

完全競争の下で、ある企業が A、B、C の３種類の生産物を製造している。

市場価格はいずれも 100 円である。

また限界費用は以下のように与えられている。

限界費用	製品 A	製品 B	製品 C
１個目	55	50	90
２個目	65	65	90
３個目	75	80	90
４個目	85	95	90
５個目	95	110	105
６個目	105	125	105
７個目	120	140	105

利潤を最大にしたい。

３種類の製品を作る順番を示しなさい。

最終的に各々何個製造するか。また利潤は合わせていくらか。

問題２：　利潤最大化に関連した一般的問題

完全競争の下で、ある企業が１つの製品を製造している。

総費用（円）は、生産量を x（個）として、

$C = 1{,}000{,}000 + 10x^2$

で与えられている。また、市場価格は 10,000 円 である。

①平均費用と限界費用を求めなさい。

②利潤を最大にしたい。

何個製造すればよいか。

そのときの利潤はいくらか。

③損益分岐点とは何か。

何個製造したときに利潤がゼロになるか。

３．利潤最大化行動と供給との関係

企業は利潤を最大化する。

完全競争の下では、利潤最大化の条件は、p=MC　である。

これから、完全競争の下では、企業は　p=MC　となるまで生産する。

従って、限界費用曲線が供給曲線でもある。

第１章補足：社会的余剰

１．社会的余剰の定義

・社会全体の経済厚生の評価は何によって行うのか。

マーシャルの社会的余剰の概念を用いる。

消費者余剰 (consumer surplus, consumer's surplus)
生産者余剰 (producer surplus, producer's surplus)
社会的余剰　＝　消費者余剰　＋　生産者余剰

①消費者余剰
「ある消費量に対して支払う用意がある最大の額と、実際の支払額との差額」

②生産者余剰
「ある生産量の実際の販売額と、最小必要額との差額」

③社会的余剰
社会的余剰　＝　消費者余剰　＋　生産者余剰
（総余剰）

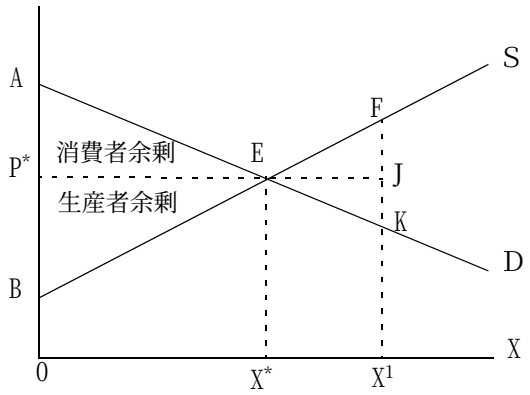
２．厚生変化の尺度

厚生変化は、消費者余剰と生産者余剰の変化つまり社会的余剰の変化で計測される。

３．市場均衡と社会的余剰

市場均衡（E 点）で、社会的余剰が最大になっている。
例えば、X^* を超えて生産量が X^1 になると、EFJ 分の負の生産者余剰と EKJ 分の負の消費者余剰が生じ、EFK 分の社会的余剰が減少する。

市場均衡（競争均衡）においては、社会的余剰が最大になることから、効率的資源配分が達成されるといえる。



社会的余剰　＝　消費者余剰　＋　生産者余剰

４．社会的余剰と経済効率

・社会的余剰の上昇が経済効率の改善と評価されるのはなぜか。

仮説的補償原理：ヒックス (J.R.Hicks)、カルドア (N.Kaldor)
政策の結果として得をする人々が、損失を被る人々の損失を補償したとしてなおかつ状態がよくなるのであれば、この政策によって効率が改善されると判断できると主張。
補償は仮設的（仮説的）であることに注意せよ。